

マダガスカルの人々と共に

Vol.6



JICA海外協力隊現地レポート

Culture!



マダガスカルのお土産

私はマダガスカル中西部の町、チルヌマンディディで青少年活動隊員として活動しています。赴任して以来、現地の人々からは、多くのことを学ばせてもらえばかりです。例えば、この国では長距離移動の道沿いに季節の果物が並び、行き交う人々がそれを買い求める光景をよく目にします。マダガスカル語で果物は「voankazo(ブアンカズ)」、道は「lalana(ララナ)」と言います。この二つの言葉が合わさった「voandalana(ブアンダラナ)」は、日本語の「お土産」にあたる言葉です。果物を道で買って帰ることが、この国でのお土産の形なのです。

すごくアフリカらしいなと感じると同時に、日本人も旅先でお土産を買うよなと思うと、日本から遠く離れたマダガスカルの人々にも、日本の「友達や家族を思う心」に通じるものがあるのだと感じ、少し嬉しくなりました。



最近は料理の際にガスを使うのをやめ、かまどで調理するようになりました。すると、今まで見えていなかった現地の人々の生活の工夫がより身近に感じられ、彼らとの距離もこれまで以上に近くなったように思います。

自己紹介

岸本光太朗

出身：京都市
隊次：2023年度4次隊
職種：青少年活動
派遣国：マダガスカル

「子どもたちと未来を創る」をモットーに、スポーツや文化活動を通じて地域の若者と交流し、共に成長する毎日です。



まだまだ文化や言葉の違いに戸惑うこともあります、「ともに学び、ともに笑う」という姿勢を大切に、日々新たな発見を楽しんでいます。これからも現地の人々と心を通わせ、少しでも地域に貢献できるよう努力を重ねていきたいと思います。



プロフィール

- 名前：鍼田早紀（くわたさき）
- 隊次：2023年度4次隊
- 派遣国：タイ
- 職種：日本語教育
- 秋の紅葉で有名な東福寺の近くで生まれ育ちました。四季が美しい日本から一転、昨年5月から常夏の国・タイでの生活が始まり、冒険の毎日を過ごしています。タイでは中高一貫校で日本語を教えています。



ワイクルー（教師へ感謝する日）

季節は暑季から雨季へと移り、現在活動している配属先に来て、もう1年が経ちました。今回は、最近学校で行われた式典「ワイクルー（教師へ感謝する日）」について紹介します。「ワイ」はタイの挨拶である合掌を意味し、「クルー」は教師を意味します。ワイクルー当日、中学1年生から高校3年生までの全校生徒約5,300名が学校内のドームに集まりました。特別なお経を読んで、歌を歌い、日頃の教師への感謝の気持ちを表します。その後、各クラスの生徒が花や果物など作った「パーンワイクルー」というオブジェを教師に渡すのですが、中にはドリアンや担任の先生の写真を飾ったり、先生が好きな化粧品を盛り付けたりと、クラスの個性がよく表れていて、見ているだけで幸せな気持ちになりました。

振り返ってみれば、タイでは教師という仕事がとても大切に、そして尊敬されている職業だと感じることが多いです。教師はタイ語で「クルー」ですが、一般的に「クンクルー」と呼ばれます。「クン」は日本語の「さん」や「様」などの敬称を意味し、数ある職業の中でクンという敬称がつくのは教師と医者だけだそうです。その理由は「人の人生に関わる仕事だから」と教えてもらいました。

私は日本での教師経験はなく、タイで初めて高校教師になったので、日本語指導以前に思春期の生徒との関わり方に思い悩むこともあります。しかし、生徒から「ありがとう！」とシャスミンの花輪をもらった時、「こんな私でも教師でいいんだ！」と思うことができました。あと一年、生徒にとってこの学校が少しでも楽しく、新しい自分の発見や成功体験ができる場所になるよう、日本語教育を通して生徒の成長を見守りたいと思ったのでした。





何もできない日の価値



自己紹介



吉井 大河

2023年度3次隊／派遣国：ベナン／職種：コミュニティ開発

オーストラリアでの農業ボランティアをきっかけに、世界の多様な価値観に惹かれました。現在はベナンで観光農業活動に取り組み、日々の失敗から学びながら活動しています。そんな現地での気づきを少しづつ言葉にしていきます。

「自分がここにいる意味は何だろう」

配属されてしまふ経ったある日、フランス語と現地語が飛び交う会議の中で、ふと思いました。

任地に来て1ヶ月が経過し、現地語の授業を終えたぼくを待っていたのは、農業のプロ達が“即戦力”を求めていた職場でした。言葉もほとんど理解できず、農業の知識も乏しいぼくは、「勉強しろ」と言われるばかり。しかし、ある時思ったのです。

「自分は労働力として来たのか」それよりも、「異なる視点を持つ人間が現地に入り、共に暮らし、関わり、刺激し合うことにこそ意味があるのではないか」

そう考え、「好きにやらせてもらえませんか」とお願いし、一度町を歩いてみることにしました。

改めて町を見ると、とても美しい景色だと感じたのです。湖からまっすぐ伸びる坂道、豊かな緑。「この町の魅力を活かして観光農業をしたい」と思ったぼくは、拙い現地語で、出会う人にそう伝えて回りました。



すると間もなく、一人の農家さんが来てくれました。

「お前の話を聞いた。俺と一緒にやろう」

彼は、以前ぼくに現地語の授業をしてくれた先生でした。偶然にも、彼も観光に関心を持っていたのです。望まれた役割を全うできなかったあの日々にも、意味があったのだと実感した瞬間でした。

ぼくらはすぐに観光農業を始め、次第に国内外から多くの人が訪れるようになっていきました。というところで、今回は以上です。

次回は、「選び直して、踏み鳴らす」というタイトルで、書いてみようと思います。

